



POINT 1
RomeIVによるIBSの
定義変更

POINT 2
押さえておくべきCQと
推奨内容の詳細

POINT 3
今後のIBS治療に
期待されること

過敏性
腸症候群



▶ Part1 10:03
▶ Part2 13:16
▶ Part3 6:23

過敏性腸症候群の最新診療
IBSガイドライン2020を踏まえて

診療ガイドラインからみる
IBS診療トピックス
解説

近年の社会的背景も手伝い、今後とも罹患者数の増加が予想される過敏性腸症候群(以下、IBS)に関して、2020年に診療ガイドラインが改訂されました。そこで、ガイドライン制作委員である正岡先生に、機能性消化管疾患に関する国際的体系分類であるRome分類を軸として、IBSの定義、分類、治療、病態、それぞれの観点から、改訂されたガイドラインのポイントを解説していただきました。特に治療に関しては、段階別、病型別のそれぞれの観点での治療指針を提示していただき、各治療法に関する詳細を伺いました。また、実臨床ベースでは捉えづらいトピックスである食事療法については、最近、注目されているFODMAP食についても言及いただいています。

今後期待される治療法である糞便微生物移植に関しては、現在の研究状況を解説いただいています。現在までに蓄積されたエビデンスに基づく治療指針、今後のIBS治療への期待、双方の観点から詳しく伺いました。



国際医療福祉大学医学部
消化器内科学 教授
国際医療福祉大学三田病院
消化器内科 部長

正岡 建洋 先生

●専門分野
消化器内科(上部消化管、機能性消化管疾患)

●所属学会
日本内科学会、日本消化器病学会(学会評議員、関東支部評議員)、社会保険審議委員会委員、外保連代表委員(処置委員会、麻酔委員会)、ガイドライン委員会IBSガイドライン作成委員 他多数



POINT 1
結腸がん手術の
各種データの紹介

POINT 2
腹腔鏡手術後合併症
発生率への見解

POINT 3
合併症や在院日数の減少を
実現したクリニカルパスのご紹介

結腸がん



▶ Part1 9:54
▶ Part2 12:42

結腸がんに対する低侵襲手術

結腸がんに対する
低侵襲手術の最新動向

2018年のデータでは結腸がんの患者数は約10万例ですが、これは全がん腫の約10%を占め、直腸がんと合わせると男女で最も罹患者数が多いがん腫になります。多くが根治手術可能なステージ1~3の患者であり、他のがん腫に比べ生存率が高く、手術手技の重要なことが伺えます。

本動画では、結腸がんの最新の低侵襲手術について解説いただいています。

低侵襲の手術として代表的な腹腔鏡手術は結腸がんで多用されています。その中で結腸右半切除は他の術式に比べて合併症発現頻度や30日後死亡率・90日後死亡率が高いとするデータや、術後合併症の発生率は開腹手術に比べ腹腔鏡手術では施設間で差があるデータが示されています。

また、2022年4月より、保険収載となり、今後の治療成績が注目される結腸がんに対するロボット支援下手術のメリットとデメリットについても解説いただいております。



東京女子医科大学病院
外科学講座教授
下部消化管外科分野長

山口 茂樹 先生

●専門分野
大腸外科、消化器外科全般、一般外科

●所属学会
日本外科学会(認定医・専門医・指導医)、日本消化器外科学会(評議員・専門医・指導医)、消化器がん外科治療認定医、日本内視鏡外科学会(理事・評議員・技術認定医)、日本大腸肛門病学会(理事・評議員・専門医・指導医) 他



不妊治療

ゴナールエフペンを用いた在宅自己注射の導入事例

7:02



注目動画1

- POINT 1 患者様の通院負担軽減のために在宅自己注射を推奨
- POINT 2 ゴナールエフペン専用の患者様導線を整理
- POINT 3 患者様への在宅自己注射の説明時の工夫

不妊治療は費用だけでなく時間がかかります。生殖補助医療の卵巣刺激に在宅自己注射を導入することで、患者様の通院負担の軽減が実現します。この度は実際にゴナールエフペンによる在宅自己注射を導入されたIVF大阪クリニックの福田先生にその導入のポイントをご紹介します。

IVF大阪クリニック 院長

福田 愛作 先生

●専門分野
不妊治療



提供:メルクバイオファーマ株式会社 JP-GON-00442

疼痛

医師会員限定動画

MIROP試験から考えるタリージェの有用性

5:54



注目動画2

- POINT 1 MIROP Studyの概要
- POINT 2 第III相国際共同臨床試験(帯状疱疹後神経痛患者)
- POINT 3 タリージェの有用性

MIROP試験は、開発治験時の「糖尿病性末梢神経障害性疼痛」及び「帯状疱疹後神経痛」だけでなく、整形外科領域の疾患も含んだ新たなエビデンスであり、既存の $\alpha 2 \delta$ リガンド製剤からタリージェへの変更後の安全性・有効性を検討した臨床試験である。タリージェは、有害事象の発現に注意しながら、用法及び用量に従って有効用量まで増量することで、疼痛管理が期待できる薬剤と考える。



獨協医科大学 麻酔科

木村 嘉之 先生

提供:第一三共株式会社

膀胱過活動

高齢OAB患者に対するベタニスの有用性

4:52



注目動画3

- POINT 1 ベタニスは発売から数多くのエビデンスを築き上げてきた
- POINT 2 使用成績調査により75歳以上/未満の患者に対する安全性・有効性が検討されている

ベタニスは発売以降、数多くのエビデンスを築き上げて参りました。その中で本動画では、実臨床におけるベタニスの有用性が検討された使用成績調査結果(75歳以上/未満年齢別解析)に関して安全性及び有効性結果に関してご紹介しています。※ベタニスの効能効果は過活動膀胱における尿意切迫感、頻尿及び切迫性尿失禁です。

提供:アステラス製薬株式会社

